ハイデガーにおける気づかいと自己性

奈良県立医科大学医学部看護学科
池　辺　　寧

Sorge und Selbstheit bei Heidegger

Yasushi IKEBE
Nara Medical University School of Nursing

要　旨

ハイデガーは、自己とは気づかいであると考えている。気づかいとは、絶えず何かに関わっている現存在の存在のあり方のことである。したがって、自己といっても、孤立的な存在ではなく、自己を超えて常に何かを気づかっている存在のことを指す。むろん他者も、現存在が気づかっている「何か」に含まれている。現存在は生来、他者との共同存在である。本稿ではこうした観点から、これまで批判されがちだったハイデガーの他者論に対して、その積極的な意義を論じた。その際、「現存在は自らのために実存する」、「我－汝関係は世界内存在に基づく」をテーゼとして取り上げた。本稿ではこの二つを手がかりにして、自己性が他者との共同存在に対する前提であること、現存在は自己性に基づいているがゆえに他者の為に存在できること、我－汝関係は孤立的な自我から出発しており実存論的には「本末転倒」であること、等々を指摘した。

キーワード：ハイデガー　気づかい　自己性　他者　世界内存在

1．はじめに

さまざまな仕方で事物や他者と関わることによって、私は生きている。事物や他者と一切関わることがなければ、私は生きていくことができない。こうした事態、つまり、絶えず何かに関わっているという現存在の存在のあり方を、ハイデガーは「気づかい（Sorge）」と特徴づける。ただし、彼が気づかいという語で論じようとしているのは、日常生活における具体的な場面での心理状態や行動形態、ましてや行動規範などではない。あくまで、それらを可能にしている現存在の存在のあり方である。ハイデガーはこう述べている。

「われわれは気づかいという表現を存在論的な構造概念と捉えなければならない。この表現はあらゆる現存在のうちに存在者的に（ontisch）見出されるような〈辛苦〉や〈憂鬱〉、〈生活の心配〉とは何の関係もない。〈のんき〉や〈陽気〉も同様だが、これらのことが存在者的に可能であるのはただ、現存在が存在論的な意味において気づかいであるからである」（SZ57）。

「気づかいは根源的な構造全体性として、現存在のあらゆる事実的な〈態度〉や〈状態〉に実存論的－アプリオリ的に〈先立って〉存している。言い換えれば、これらのうちに常にすでに存している。それゆえ、気づかいという現象は、理論的態度に対する〈実践的〉態度の優位を言い表すものでは決してない。眼前存在者をただ直観しつつ規定することも、〈政治的活動〉や休暇中の娯楽に劣らず、気づかいという性格を持っている」（SZ193）。

ハイデガーが気づかいという語で集約しようとしているのは現存在の存在のあり方であって、上で引用したように気づかいは「存在論的な構造概念」と捉えなければならない。本稿ではSorgeというドイツ語に「気づかい」という訳語をあてるが、Sorgeを英訳するとcareとなる。そのため、ケアを論じている書物のなかには、ハイデガーはケアすることを人間の本質であると捉えた、といった趣旨のことを述べているものがある。だが、こう解してしまうと、間違いとは言い切れないが、ハイデガーの真意を見誤ってしまうおそれがある。彼は現存在の存在のあり方を表す語としてSorgeという語を用いたが、この語に倫理的に高い価値を与えているわけではないからである。本稿では、言葉だけが一人歩きして引用されがちな、気づかいという概念を鮮明にし(1)、さらにこの概念を手がかりにしてハイデガーにおける他者論の可能性を考察する。

2．現存在の卓越した構造としての気づかい

存在者的なレベルで語られる現存在の理論的態度や実践的態度、あるいは辛苦や生活の心配などは、気づかいから生じてくるにせよ、気づかいと同一視することはできない。気づかいという術語や、この術語のうちに含まれている諸現象は、構造現象を意味しているのであって、日常的・先学問的な意味において理解されてはならない（GA21,227）。気づかいはそれらを可能にする条件である。それゆえハイデガーは気づかいという現象を、「現存在の卓越した構造」（GA21,220）とみなす。

ハイデガーは現存在を、他の存在者と同列に並べられる一存在者ではなく、卓越した存在者であると捉えている。というのも、現存在という存在者は他の存在者とは違って、ただ単に存在者的に存在しているのではなく、存在を了解するという仕方で存在しているからである。それを彼は周知のように、「この存在者には自らの存在において、この存在自身にかかわりゆくことが問題である」と定式化する（SZ12.etc.）。ハイデガーは現存在を特徴づける際に、「…にかかわりゆくことが問題である（es geht um...）」という言い回しを頻繁に用いるが、この言い回しは気づかいの性格を端的に表現している。彼は1925/26年冬学期の講義のなかで次のように述べている。

> 「現存在には自らの存在において、この存在自身にかかわりゆくことが問題なのだが、このような存在者の存在の根本的なあり方を、われわれは気づかいと名づける。気づかいは現存在の存在の根本様態である」（GA21,220）。

もっとも、「この存在自身にかかわりゆくことが問題である」といっても、現存在はいわば「孤立的な気づかい」（GA21,222）として、まず自己自身を気づかい、そののちに他の存在者を配慮するようになるわけではない。ハイデガーは現存在以外の存在者に対する現存在の関わり方を配慮（Besorgen）という語で特徴づけるが、配慮も気づかい（Sorge）のうちに含まれる。というよりも、気づかいは常に気づかう対象を伴っているのだから、「同時に、かつ、常にすでに配慮」（GA21,222）である。

一方、他者に対する現存在の関わり方は配慮ではなく、顧慮（Fürsorge）と術語化される。ハイデガーは1925/26年冬学期の講義において顧慮に言及する際、「共に気づかうこと（Mitsorge）、より正確に言えば、顧慮」と言い換えている（GA21,223）。現存在は世界内存在として、常に自己を超え出て他者と共に在る存在（共同存在）であり、決して孤立的な存在ではない。現存在の世界は常に他者と共に分かちあっている共同世界である。したがって、気づかいとは、他者と共に気づかうことにほかならない。「共に気づかうこと」という語は『存在と時間』では用いられていないが、現存在の世界が共同世界であることから帰結する「気づかい」の性格をよく言い表した語である。

だが、「共に気づかうこと」という語では、

現存在が他者とどう関わっているのかが示されていない。他者と関わる形態には、対等な関係のほかに、支配と従属、支援と依存、その他さまざまな形態が考えられるだろう。いずれの場合であっても、「共に」という語では自他のあいだに繰り広げられる相互行為を十分に表現することはできない。そこでハイデガーは、他者を気づかうことの積極的な様態(2)に着目して、「共に気づかうこと」という語に代えて、「顧慮（Fürsorge)」、文字通り訳せば「ために気づかうこと」という語を用いたのであろう。顧慮とは、「共に存在している者のために気づかうこと（das Sorgen für Mitseiende)」（ZS204）である。

顧慮の例として、ハイデガーは「病体の看護」を挙げている。また、「顧慮」の原語である Fürsorge は「福祉事業」や「福祉施設」などをも意味するドイツ語であるが、ハイデガーは Fürsorge に言及する際、この点にも着目している（SZ121)。看護や福祉といった活動は、現存在が生来、他者との共同存在であること（次節参照）に起因する。これらの活動は存在者的なレベルでは、「…のために気づかう」という顧慮の典型的な例であろう。しかし、ハイデガー自身も明言しているように、お互いに協力し合うことのみならず、反目しあうことや無視しあうこと、互いに素通りしあうことや互いに何も関わりあわないこともまた、顧慮の可能的なあり方である（SZ 121)。顧慮という語は他者との共同存在として、常に他者を気づかっている現存在の存在のあり方を述べた術語であって、あるべき人間関係を説いた価値語では決してない。

現存在は世界内存在として、他の存在者を配慮し、他者を顧慮している以上、現存在の存在の根本的なあり方である気づかいは配慮であり、顧慮でもある。気づかいという語は本来、「配慮しつつ顧慮している気づかい（besorgend-fürsorgende Sorge)」（GA21,225）と理解されなくてはならない。ところがハイデガーはこのように考えているものの、気づかいの構造を提示する際には他者への顧慮に関する言及を留保する。というのも、他者について陳述を行うことは「本質上、非常に難しい」からであり、世界についての陳述のうちにも他者は何らかの意味で言及されているからである（GA21,235)。ハイデガーの他者論に対する批判はよくなされる。たしかに『存在と時間』では、現存在を他者との共同存在と術語化したが、他者は日常的に接する世人としてしか分析されなかった。そのため、他者論の不在ないしは不徹底という批判がなされることもやむを得ない。しかしハイデガーの講義録を繙くと、彼自身は他者の問題を絶えず念頭に置いていたことは随所に窺える。この点については次節以降で取り上げたい。

先に述べたように、現存在は自らの存在において、この存在自身にかかわりゆくことが問題であるような存在者であり、こうした存在者の存在のあり方を特徴づけた語が気づかいであった。「存在自身にかかわりゆくことが問題である」と定式化している以上、かかわりゆく行き先である存在自身はまだ把持されていない。ハイデガーはかかわりゆく存在自身を、「現存在がまだそのように存在しているわけではないが、しかし存在しうるところの存在」と捉え直し、さらにこう述べている。「〈…にかかわりゆくことが問題である〉ということのうちには、存在しうることとしての固有な存在を追求すること（Aussein-auf）が存している」（GA21,235)。それゆえ、気づかいという語も固有な存在しうることの追求を意味する。しかも、追求するためには追求されるものが何であるのか、漠然としてであれ予め了解しておく必要がある。そこでハイデガーは、「気づかいとは、現存在が自己自身に先立って存在していることを意味する」と述べる（GA21,235)。

もっとも、自己に先立って存在していることは、他の存在者から遊離した「無世界的な〈主観〉のうちに存する孤立的な傾向」（SZ 192）を指しているのでない。現存在はそのつどすでに、ある世界のうちへと投げ入れられている。ハイデガーはこの点に着目して、

主観という語を「無世界的」として退け、現存在を世界内存在と性格づける。現存在が世界内存在である以上、自己に先立って存在しているといっても、このことはある世界のうちですでに存在しつつ、自己に先立って存在していることにほかならない。したがって、現存在が自らの最も固有な諸可能性に向かって自由であることにおいて存在できるようなものになることも、現存在が自らが配慮している世界に引き渡されていることも、簡潔に言えば、企投も被投性も、気づかいが等根源的に規定しているのである（SZ199）。

以上のことを踏まえ、ハイデガーが提示した気づかいの構造、厳密に言えば、他者への顧慮を留保した「配慮しつつある気づかい」の構造は、次のような構造である。

> 「現存在の存在論的構造全体が有する形式的に実存論的な全体性は、次のような構造において捉えられなければならない。その構造とは、現存在の存在は（世界内部的に出会われる存在者）のもとでの存在として、自己に先立って（世界）のうちですでに存在していることを意味している、というものである。このような存在が、気づかいという名称の意義を満たしているのである。この場合、気づかいという名称は純粋に存在論的・実存論的に使用されている」（SZ192）。

配慮や顧慮はそれぞれ、現存在が他の存在者のもとでの存在であり、他者との共同存在であることを言い表した語である。それに対して、気づかいとは配慮や顧慮をも含んだ現存在の存在のあり方のことであって、「自我がおのれ自身へととる孤立的な態度」（SZ193）を意味しているのではない。したがって、気づかいは配慮や顧慮との類比から導き出されるような「自己に対する特別な態度」（SZ193）を指しているのではない。ハイデガーに従えば、自己とは、他とは切り離された孤立的な存在ではなく、常に何かに関わっている存在であると同時に、すでに何かのもとにある存在である。こうした自己の捉え方は先に記した気づかいの構造と重なる。「気づかいは自己という現象をそれ自身のうちにすでに蔵している」（SZ318）。自己とは気づかいであり(3)、「自己への気づかい（Selbstsorge）」という表現は同語反復である（SZ193）。それでは自己であること（自己性）とは一体どういうことであろうか。以下、他者の問題と併せて、この問題を論じていきたい。

3．現存在は自らのために実存する

自己性を考えていくうえでまず着目したいのは、自らのために（umwillen seiner）在ることこそが現存在の存在の本質的な規定である、とハイデガーが考えていることである（GA26,243）。むろん、彼は「現存在は自らのために実存する」という命題でもって、現存在の目的はもっぱら自己自身を気にかけることにあり、他者はそのために利用する道具である、などと主張しているわけではない。「そのような事実的・存在者的解釈は、現存在はそもそも自ら自身のために存在するという、現存在の存在論的な体制にもとづいてのみ可能である」（GA24,420）とハイデガーは断言し、続けて次のように述べる。「現存在はそのように存在しているがゆえにのみ、現存在は他の現存在とともに存在することができる」（GA24,420）。ハイデガーのねらいは、人間が利己的に、ないしは利他的に振る舞うことができる「可能性の条件」を提示することにある（W156）。それを彼は、「現存在は自らのために実存する」という存在論的な命題でもって言い表そうとしている。状況に応じて利己的にも利他的にも振る舞うのが通常の人間である。「自らのために」といっても、この命題はあくまで存在論的なレベルで語られているのであって、人間は私益や自分にとっての最善の事柄のために行為すべきである、といった倫理的利己主義を含意しているわけではない。

言うまでもなく、私は私であって、他の誰とも代替不可能である。現存在はそのつど私である、というようにしか存在できない。他

者とのあいだに繰り広げられる多様な関わり合いを考えようとするときでも、まず問題視すべきなのは私が自己自身の存在にいかに関わっているのか、ということであろう。ハイデガーはこの問題を「自らのために」という語で言い表す。つまり、「自らのために」という語を用いて彼が述べようとしていたのは、「自己を了解することは、自ら自身のために実存することを意味する」(GA27,328)ということにほかならない。

したがって、他者の為に自らを犠牲にしている人々が大勢いること、人間は自分ひとりで生きているのではなく共同社会のうちで支えあって生きていること、こういった事柄を指摘したところで、「現存在は自らのために実存する」という命題を反駁することにはならない。先の命題は他者との共同を可能にする根拠となる現存在のあり方を示しているのであって、他者を排除するものでも利己主義を主張するものでもないからである。ハイデガー自身も、現存在は他者とともに、他者の為に、他者のおかげで存在できると考えている(GA26,240)。彼もまた、現存在は他者によって支えられた存在であること、他者の為に力を尽くすべきこと、こういったことを認めている。だが、こういったことが可能となるためには、「現存在は本質上、それ自身であることができなければならないし、本来的にはそれ自身であらねばならない」(GA27,324)とハイデガーは考えているのである。このあたりの彼の主張は次の箇所によく表れている。

> 「現存在が自己性に基づいて自己自身をあえて選ぶことができるがゆえにのみ、現存在は他者の為に(für den Anderen)力を尽くすことができる。また、現存在が自己自身へとかかわる存在において〈自身〉のようなものをそもそも了解できるがゆえにのみ、現存在は汝ー自身に端的に耳を傾けることができる。現存在が、〈ために(Umwillen)〉によって構成され、自己性において実存しているがゆえにのみ、ただそれゆえにのみ人間的共同社会のようなものは可能である。これらのことは第一義的な実存論的・存在論的本質諸命題であって、利己主義と利他主義のどちらが先に、または後に秩序づけられるのかについての倫理的なテーゼなのではない」(GA26,245)。

これまで「他者の為に(für)」という語句を何度か用いた。この語句は他者の利益や幸福、善の為に自己を犠牲にしたり、力を尽くしたり、といった利他主義的な意味合いで使われている。だが、ハイデガーは利己主義を主張しているわけでも、逆に利他主義を強調しているわけでもない。彼が問うているのは、そうした振る舞いをする現存在の存在のあり方である。現存在が他者の為に、また他者とともに存在することができるようになるのも、現存在が自己性に基づいているからである。ハイデガーにとっては、現存在は自己自身の存在にいかに関わっているか、つまり自己性、より正確に言えば自己関係性が何よりもまず問題である。そして彼はこのことを、「…にかかわりゆくことが問題である」と定式化したり、「自らのために実存する」という命題を提示したりするのである。

本稿では「ために」という同じ日本語の表現を用いて訳したが、ハイデガー自身は先の引用文で für と umwillen とを使い分けている(便宜的な区別として、für に対しては「為に」、umwillen に対しては「ために」という表記をあてて訳し分けた)。ハイデガーは「為に(für)」を存在者的なレベルにおける利他主義的な意味合いで使っている一方で、「ために(umwillen)」をもっぱら現存在の存在の仕方を規定した語として用いている。「ために」の性格をよく言い表した箇所として、たとえば次の箇所を挙げることができる。「現存在にとっては自らの存在において本質上、この存在自身にかかわりゆくことが問題なのだが、〈ために〉は常にこういった現存在の存在に関係している」(SZ84)。

ハイデガーが言う「ために」は彼自身も示

唆しているように（GA21,220f.）、カントの「目的自体」と密接に関連している。カントは自己も他者も常に同時に目的として取り扱わなければならないと説いた。同様にハイデガーも、現存在は「自らのために」だけではなく、「他者のために」も存在していると考えている。他者は「自らのために」のうちに収斂してしまう存在では決してない。ハイデガーはこう語っている。「共同存在として、現存在は本質上、他者のために（umwillen Anderer）〈存在している〉。……共同存在のうちで、つまり、実存論的な〔意味での〕他者のために、ということのうちで、他者はその現存在においてすでに開示されている」（SZ123. 〔　〕内は引用者の補足）。むろん、ここで言う「他者のために」は実存論的・存在論的な意味で用いられている。この語は、現存在が他者との共同存在であることを特徴づけた表現であって、自分を犠牲にして他者の利益や幸福などを増す行為をしたり、他者のことを思いやったり、といった利他主義的な事柄を含意していない。ここで述べられているのは、現存在は共同存在として、自己にかかわる存在であると同時に、他者にかかわる存在であるということである。

現存在が「他者のために」存在し、他者との共同存在であることを述べる際、ハイデガーは「生来（von Hause aus）」という語を何度か付している。「生来」という語が付されているところに、現存在が他者との共同存在でしかありえないことがよく表れている。というのも、現存在は他者がすでに存在している世界のなかへと生まれ出たのであり、現存在は存在しているかぎり、いかなる行為も絶えず他者との関わりのなかにあらざるを得ないからである。関わる、関わらないといった意志にかかわりなく、現存在はすでに他者を顧慮している。他者がおらず、たとえ一人でいるときであっても、現存在は他者との共同存在である。現存在が共同存在であることは、現存在の意志的行為によるものではない。あくまで「生来」という仕方でしか特徴づけられない、現存在の「本質体制」（GA29/30,302）である。「生来」という語が用いられている箇所を一つ挙げておく。

> 「事実的現存在は明確にであろうとなかろうと、相互共同的に－存在しうることのために（um-willen des Miteinander-seinkönnens）存在している。このことはまったくもって、現存在そのものが生来、他者との共同存在によって規定されているがゆえにのみ可能である」（GA24, 419f.）。

もっとも、現存在が生来、他者との共同存在であるといっても、ハイデガーが述べる他者は、私と何らかの共通性を備えた他者、たとえば同じ価値観や目標を共有した「隣人」を指している。「現存在は生来、すでに…に対する隣人である」（GA27,138）というハイデガーの言葉に、そのことがよく表れている。彼は他者と共に在ることを現存在の本質とみなしているにとどまっており、いかにして他者と共に在るかまで十分に踏み込んで論を展開しているとは言い難い。そのため、ハイデガーの他者論にはこれまで種々の批判がなされてきた。たとえばブーバーはおおむね次のように批判している。他者に対してたとえ強く心を動かされることがあっても、ハイデガーの言う顧慮という関わり方であれば、他者の傍らに立っているだけであり、他者に向かって自己を開いているとはいえない。他者を助けるときでも、現存在はどこまでも自己のもとにとどまっており、自己の存在の枠を突き破ることはない。現存在は他者のことに立ち入ろうとすることはあっても、他者が自分のことに立ち入ろうとすることは決して望まないだろう、と(4)。ハイデガーの所論にはこういった批判を招く難点があるにせよ、彼は他者の問題を決して軽視していたわけではない。ハイデガーの他者論と言えば、世人の分析が思い浮べられがちだが、それだけでなく、彼は現存在を世界内存在と捉える観点から独自の他者論を展開している。次にこのことを見ていきたい。

4．我－汝関係は世界内存在に基づく

ハイデガーの他者論の特徴として、感情移入論への批判について、まず簡単に触れておこう。彼は現存在の本質体制としての他者との共同存在を指摘することによって、感情移入論を批判する。感情移入論は、他とは切り離された自我圏域を有する自我（Ich）がまず第一に、かつ最も確実に自己自身に与えられていると捉え、自己を他者へと移し入れることによってはじめて他者と関わることができると考える。言い換えれば、人間はまずは孤立的な自我ないしは主観として存在しており、感情移入という橋渡しを通じて相互共同性（Miteinander）が生じると考える。

だが、ハイデガーによれば、感情移入論が成立するのは、人々が「他者へと移入された存在」であることを見据えずに、「無関心な並行（Nebeneinanderhergehen）」（GA29/30,304）という状態を保持したまま相互に行動しあうからである。「無関心な並行」という状態にあるから、自己から他者への橋渡しとしての感情移入という考えが生まれてしまう。それに対して、ハイデガーは現存在を、常に自己を越え出て他者と共に在る存在、すなわち「他者へと移入された存在」であるとみなす。彼に従えば、感情移入が共同存在をはじめて構成するのではなく、共同存在に基づいて感情移入ははじめて可能になる（SZ125）。

現存在が他者との共同存在であることから、ハイデガーは感情移入論に対する批判を導き出すのだが、この批判はさらに「我－汝関係」への批判につながっていく。彼は後にツォリコーン・ゼミナールで次のように述べている。

> 「我－汝関係（Beziehung）やわれわれ関係がよく引き合いに出されるが、これらのことが話題になるとき、われわれは何か非常に不完全なことを語っている。我－汝関係やわれわれ関係といった言い回しは依然として、まずは孤立している自我から出発している」（ZS145）。

我－汝関係について言及するとき、ハイデガーは名前を挙げて批判しているわけではないが、ブーバーやレーヴィットらを念頭に置いていることは言うまでもない。ブーバーは「はじめに関係ありき」(5)と言う。我－汝関係を標榜する論者の主張の前提は、「はじめに関係ありき」という点にあるだろう。それに対してハイデガーは、「関係（Beziehung）という概念は他者へとかかわる真の関わり（Verhältnis）に入りこむことを遮断する」、と応える（ZS144）。彼は関係という概念でもって、二つのそれぞれ孤立した自我ないしは主観がまず想定され、そのうえでこの二つの自我がはじめから関連しているような事態を指している。ハイデガーは「我－汝関係」論も感情移入論と同様に、孤立的な自我から出発して立論していると考え、その観点から批判を行う。すなわち、「はじめに関係ありき」と言ったところで、関係の両極である我と汝のほうがやはり先に存在していると批判する。

先の引用文でハイデガーは「関係」という語を退けたうえで、「真の関わり」という語を用いていた。そのかぎり、彼は「関係」と「関わり」という語を明確に使い分けているように思われる。ところがハイデガーは他の箇所ではこれらを必ずしも明瞭に区別していない(6)。関わり（Verhältnis）を関係（Beziehung）などから区別して独自の他者論を展開したレーヴィットに比べると(7)、ハイデガーは不徹底である。ただ、「関わり」という語を明確に定義づけていないにせよ、ハイデガーが世界内存在を念頭に置いて「真の関わり」を語っていることは容易に読み取ることができる。というのも、ハイデガーは次のように述べているからである。「我－汝関係（Verhältnis）は現存在と現存在との関係（Verhältnis）として、世界内存在に基づいてのみ、その可能性を持つ」（GA24,394）。

ハイデガーは主観－客観の二元論を批判して世界内存在という語を術語化したのだが、この語には同時に我－汝関係への批判も込められている。彼は次のように述べている。「我

ー汝関係（Verhältnis）が卓越した実存ー関係であるとしても、実存とはそもそも何を意味するのかが問われないままであるかぎり、われわれはこの実存ー関係を実存論的に、すなわち哲学的に認識することができない」（GA24,422）。では、実存とは何か。ハイデガーは、実存には世界内存在が属しているという。世界内存在とは、現存在がその存在において自己自身を超え、世界の内に存在していることを言い表している。現存在が自己自身を超えていること、このことをハイデガーは超越と名づける。

だが、超越といっても、現存在と世界が主観と客観のような二つの存在者として存在し、世界の外にある現存在が世界の内へと超越していく、といった事態を指しているわけではない。ハイデガーはこう言っている。「現存在はまず初めは何らかの謎めいた仕方で実存し、そののちに自己自身を超えて、他者あるいは眼前存在者への超出を遂行するのではない。そうではなく、実存することとは常にすでに、超え出ること、よりよく言えば、超え出てしまっていることである」(GA24,426)。ハイデガーは現存在を、常に自己を超えて何かを気づかっている存在、つまり実存と捉え、孤立的な自我を起点に置くことを拒否した。常に何かを気づかっていること、このことを可能にしているのが超越である。自己であるとは常に何かを気づかっていることであり、「超越は現存在が自己という性格を持つことにとっての前提である」(GA24,425)。と同時に、「自己性は、現存在が汝ー自身とともにいる我ー自身という意味において、他者との共同存在であることに対する前提である」（GA24,426）。

現存在が他者との共同存在であるのは、現存在が世界内存在であるからだが、他者もまた同じく世界内存在である。そこでハイデガーは現存在が他者との共同存在であることをさらに、「共同世界内存在（Mit-in-der-Welt-sein）」（GA24,394）と特徴づける。ハイデガーに従えば、我ー汝関係を築いているから、他者との共同が生まれるのではなく、現存在は生来、他者との共同存在であるから、我ー汝関係も可能になるのである。言い換えれば、私は共同世界内存在であるから、世界の内で「ある他者に対する可能な汝」（GA24,422）となることができる。にもかかわらず、「我ー汝関係」論は現存在が有している世界内存在という根本体制を見据えずに、孤立的な自我ないしは主観を諸客観に対置させる。それゆえ、ハイデガーは我ー汝関係を「本末転倒」と批判する（GA24,394）。もちろん、先に引用したように、彼は我ー汝関係を「ある卓越した実存ー関係」とみなし、高く評価している。個々の人間の生き方を考えようとした際、汝がいることの重要さを強調する我ー汝関係は卓越した面を有しているからである。だが、我ー汝関係は「具体的な人間学の諸問題」（GA24,394）を考えるうえでは示唆に満ちていても、実存論的・存在論的にはあくまで「本末転倒」である。

ところで、ハイデガーが問題としている自己性は、汝の存在や我ー汝関係を可能にする条件である。それを彼はあるときには自我性（Ichheit）やエゴ性（Egoität）という語でもって特徴づけようとしている。エゴ性は我にも汝にもあてはまる中立的な表現として、汝の根底にも存している自我性という意味で用いられている。ハイデガーによれば、我も汝も現存在として根源的にはエゴ性によって規定されており、それゆえ他の現存在の為に、また他の現存在とともに実存することができるという。ただ、自我性やエゴ性という語にはどうしても、汝であること（Dusein）から区別された意味での我であること（Ichsein）の意味合いが残っているため、現存在の本質を言い当てているとは言い難い。そこでハイデガーは、selbst という語が Ich-selbst（我ー自身）や Du-selbst（汝ー自身）というように、我についても汝についても同じような仕方で語ることができることに着目し、自我性やエゴ性という語の代わりに、Selbstheit（自己性）という表現を用いる（GA26,242f.）。

ハイデガーが述べている自己性を理解していくうえで注意しておかなければならないことがある。それは先に参照した箇所に続けて、彼が次のように述べていることである。「純粋な自己性は、現存在の形而上学的中立性として受け取られるかぎり、同時に存在論における形而上学的な孤立化に対する表現である」(GA26,243)。ハイデガーに従えば、この孤立化を独我論とみなしてはならない。ここで言う孤立化とは、独我論が考えるように、私は孤立的な自我としてまず唯一人で存在し、そののちに何らかの謎めいた仕方で他者と共に存在するようになることを指しているのではないからである。たとえ一人でいるときであっても、私は本質的に他者との共同存在である。そして、この観点からハイデガーは我－汝関係もまた独我論に陥っていると批判する。というのも、我－汝関係は孤立的な自我同士の関係であり、いくら関係を説いたところで、「二つの独我論」(GA24,394, GA27,146) が語られているにすぎないからである。

言うまでもなく、それぞれの他者は他とは絶対に異なった存在である。他者は他者なのであって、私の自己自身への関わり方が投影された第二の自我では決してない。私と他者との関わりもまた、それぞれの他者が独自な存在であることに応じて、「還元不可能で独自なもの」(GA21,236,vgl.SZ125) である。むろん、他者を理解しようとすれば、どうしても私による理解という制約を伴ってしまう。この制約は、私が他者とかかわるうえで必然的に生じてくる。だが、この制約は「汝としての他者にかかわる存在をすでに前提しているのであって、他者にかかわる存在をまず最初につくり出すのではない」(GA21,236)。私は常にすでに何かを気づかっている存在であり、独我論が考えるように、私自身だけが私に与えられているわけではない。

ただ、日常的な世人自己ではなく、固有の自己であろうとすれば、同時に他者を固有の他者として認めて本来的な相互共同性を築いていこうとすれば、世俗的なつながりを一度断ち切って、自己を単独化しなければならない。ハイデガーはこのように考えているゆえ、先の引用文にあったように、自己性は「存在論における形而上学的な」という限定が付され、孤立的自我とは一線が画されているにせよ、「孤立化に対する表現」とならざるをえない。単独化は必然的に独我論へとたどり着かざるをえない。ハイデガーは独我論そのものを執拗に退けるものの、実存論的な意味での、しかも括弧つきという限定を加えたうえで、独我論を肯定的に次のように言及する。

> 「不安は現存在を単独化し、〈単独の自己〉として開示する。実存論的〈独我論〉は孤立的な主観事物といったものを、無世界的に現れる毒にも薬にもならない空虚さのうちへと置き移すのではなく、現存在をきわめて極端な意味において、世界としての自らの世界に直面させ、それでもって現存在自身を世界内存在としての自己自身に直面させる」(SZ 188)。

不安を契機として自己自身に直面させる、といった単独化を根底に据えている以上、ハイデガーの所論も独我論とみなされるかもしれない。しかし、自己自身といっても「孤立的な主観事物」ではなく、「世界内存在としての自己自身」を指している。つまり、不安を契機として直面することになる自己自身とは、他とは切り離された孤立的な存在ではなく、常に何かを気づかっている存在のことである。そのかぎり、ハイデガーが自らの立場に対して名づけた「実存論的〈独我論〉」はむろん、通常の独我論とは性格を全く異にしている。

5．結びにかえて

以上、本稿では、気づかいと自己性に焦点を当てて『存在と時間』刊行前後のハイデガーの思索の一端をたどってきた。ハイデガーは、自己とは気づかいであると考えている。自己といっても先程も述べたように、孤立的な存在ではなく、常に何かを気づかっている

存在のことである。「何か」にはむろん、他者も含まれている。そこで、本稿ではハイデガーの著作や講義録の随所に散見される自己性や他者についての記述を再構成し、彼が自己と他者との関わりをどのように捉えていたのかを明らかにしてきた。この試みは同時に気づかいの構造の解明にもつながる。とはいえ、本稿で取り上げたのはあくまでハイデガーの思索の一端にすぎない。「気づかいの構造の根源的統一は時間性のうちに存している」（SZ327）とハイデガーが述べているように、気づかいの構造を論じようと思えば、当然取り上げるべき主題として時間性の問題が残っている。筆者の今後の課題としたい。

註

ハイデガーの著作等からの引用・参照頁は次の略号を用い、本文中に記した。

ＧＡ　*Gesamtausgabe*, Frankfurt a. M. 1975ff.
（巻数，頁数の順で記す）

ＳＺ　*Sein und Zeit*, 15.Aufl., Tübingen 1979.

Ｗ　*Wegmarken*, 2.Aufl., Frankfurt a. M. 1978.

ＺＳ　*Zollikoner Seminare*, M.Boss（Hg.）, 2.Aufl., Frankfurt a. M. 1994.

（１）　本稿では、『存在と時間』とその前後の時期の講義録を主に取り上げる。初期フライブルク講義については、拙稿「初期ハイデガーにおける生と気づかい」（『奈良県立医科大学看護短期大学部紀要』第７号、2003 年）を参照していただきたい。

（２）　ハイデガーは顧慮の積極的な様態として、「代理を務めることによって支配する顧慮」と「模範を示すことによって解放する顧慮」の二つの極端な可能性を挙げている（SZ122）。

（３）　人間を事実的生と捉えた初期フライブルク講義では、ハイデガーは生（生きること）を気づかうこと（Sorgen）とみなしている。彼はこう述べている。「生きることは、関わるという点においてその意味を考えるならば、気づかうこととして解釈することができる。生きることとは、何かのために気づかい、何かのことで気づかい、そして何かを気づかいつつ生きることにほかならない」（GA61,90）。

（４）　Vgl. Buber,M., *Das Problem des Menschen*, 6.Aufl., Gütersloh 2000, S.106.

（５）　Buber, M., Ich und Du, in *Das dialogische Prinzip*, 8.Aufl., Gerlingen 1997, S.22.

（６）　ハイデガーは Ich-Du-Beziehung と Ich-Du-Verhältnis という表現を区別せずに用いている。そのため本稿では Verhältnis を「関わり」と訳したが、Ich-Du-Verhältnis には「我－汝関係」という訳語をあてた。

（７）　Vgl. Löwith,K., *Das Individuum in der Rolle des Mitmenschen*, in: Sämtliche Schriften, Bd.1, Stuttgart 1981, S.75ff.